

やぶくろひ

クリスマスは嫌いじゃない。ただし、いっしょに過す女がいる場合に限ってだ。

四十年の人生の中で、ほんの子供の頃をのぞけば、たいていクリスマスには誰かしら女がいた。

小学校五年生のときはハルカとファーストキスをした。中学三年のクリスマスには、ふたつ上のユミコが「筆おろし」をしてくれた。

それから二十五年、女のいないクリスマスは初めてかもしれない。

「ノーマネー、ノーマネー」とはよくいったものだ。懐がここまで寒ければ、女など作れる筈がない。

もともと考えてみれば、人生の曲がり角にはたいい女がからんでいて、結果必ずといっていいほど悪いほうに向かつていったような気がする。

それはつまり、甲賀悟郎が女好きだからに他ならない。

女好きなんて世の中には掃いて捨てるほどいる。健康な成人男子なら、十人のうち八人くらいは女好きだ。自分はその八人のうちでも、かなり上位にくる女好きではあるだろうが、と甲賀は唇をすぼめた。

女好きはいいとして、それをプラスにもっていか、マイナスにもっていか、だ。

そこでさっきの曲がり角問題だ。

世の中には女好きを広言している俳優や作家がいて、それが仕事の役に立っている。スキャンダルで名前を売ったり、経験が商売道具になるのだ。

プラスの女好きとはそういうことで、この場合、相手がどんな女であろうと、最後は自分にとって都合のいい結果にもっていく。

ひるがえって甲賀は、マイナスの女好きだ。相手にひきずられる。女の事情に巻きこまれ、気づくと泥沼にはまっていることが多々あった。

仕事もそれでしくじった。いや、それ以前に結婚からしてまちがいだった。仕事をしくじった原因になった女と女房は別だが、どちらも浪費好きという点では似ていた。

甲賀はアパートのくすんだ天井を見つめ、息を吐いた。マイナスの女好きの自分に、こうして女がいない、という状況は、人生の転機なのではないだろうか。少なくともマイナスにはいかならないからだ。

だが現状維持はマズい。これが「ノーマネー」でなければ、現状維持、結構だ。低め安定とい

うのがよろしくない。

とはいえ、当面、打開策は思いつかない。

年を越すとんでも、餓死しないという程度ではあるが、金はある。幸いなことに、麻雀荘でこれを流す心配はない。なぜならすでに雀荘には二十万近い、負けの立て替えの借金がある。このこ近づけば、有り金を全部もっていかれた上に、半荘ハンチヤンすら打たせてもらえず叩きだされるだろう。

冷静に考えて、自分は誘惑に強くない。いや、かなり弱い。だから借金がなかったら、この瞬間、雀荘にいる。

つまりこれも転機だ。女の次に好きな麻雀とも、今は手を切っていられる。もちろんフリー雀荘は他に何軒もある。だから本当に打ちたくなったら、地元以外のところにいけばいい。

それがいわばお守りとして甲賀の心にはある。だがたぶんいかない、という予感もあった。理由はひとつだ。年越しの資金を作った方法だ。

杜英淑トエイシュクに念を押された。英淑にあつた借金を帳消しにした上に、五十万を渡された。

「ゴローちゃん、このお金、無駄づかいしちゃう駄目だよ。麻雀駄目、パチンコも駄目。女にあげちゃうもつと駄目。いい？」

英淑だつて切羽詰まつて、甲賀に頼んできたのだ。

甲賀にしてみれば、その手があつたかで、目の前がぼつと開けたような気がしたものだが、頼んできた英淑のほうは深刻だった。

「ゴローちゃんにこんなこと頼みたくないね。でも他に、ちょうどいい人がいないよ。あてにしていた人、急に死んじゃったね。あと一カ月、待ってくればよかつたのに。でも年寄りじやしようがないか」

年寄りといつたつて、まだ六十四だつたのだから、それほどじゃない。

「手続きから何から、全部こつちでやるから、調査の電話きたときだけ、話合せて。いい？」

英淑には百万近い借金があつた。もちろんオツケだ。英淑はため息を吐いてつぶけた。

「でも、本当はこんな仕事、よくないよ。わたしは人助けだからいいけど、ゴローちゃんは駄目だよ。一度だけね」

こんな金になるのなら一度じゃなくなつてまつたくかまわない、とそのとき甲賀は思ったものだ。

そうして今、財布の中には十五万の金がある。三十五万はどこに消えたかという、麻雀以外の使い途みち、つまりパチスロといきつけのキャバクラだ。

あと一步のところさやかを口説けた筈だつた。十二月が誕生日のキャバ嬢つて、どうなのだろう。シャンペンを二本入れ、プレゼントも買ってやった。さやかも満更じゃなかつたと思う。

なのにあのオヤジがかつさらつていった。

ドンペリロゼを三本だど。あんた勝負する場所まちがつてるよ。錦糸町きんしちやうなんかじゃなくて、銀座か六本木にいくれ。

甲賀は、思いだしてもムカつく、あのオヤジに毒づいた。質屋つてそんなに儲かるのか。

だがオヤジは、金の使い途をまちがえていない、ともいえる。銀座や六本木だったら、たかが三本のドンペリロゼでなびく女はそうはいないだろう。錦糸町だからこそ、さやかもぐつときってしまったのだ。

それにさやかには「結婚願望」がある。万が一ものにして、クリスマスをいっしょにいらるなんてことになったら——それはそれで楽しいは楽しいが——来年、自分は地獄を見たかもしれない。

定職なし、貯えなしとバシレて、捨てられるのならまだいい。「わたしのために真面目に働いて」なんていわれて、居すわられたひには——。

こうやって冷静に分析してしまうところが、また自分の弱いところだ。敗因を敗因として、妙に納得してしまう。

女好きなのにながむしゃらさが無い。女つてのは、がむしゃらなところがある男が好きなものだ。もちろん見当ちがいのがむしゃらさはいけ無い。そんなのはストーカーだと思われるのがオチだ。

一見クールで冷静そうなのに、いくときはいく、これがいいのだ。

さて、自分は、いったことがあるだろうか。

どうもないかもしれない。基本的に弱気というか、争いごとが好きではない。殴り合いなんてまっぴらだ。

不意に電話が鳴り、甲賀はびくつとした。

寝そべっていたコタツから上半身を起こす。鳴っているのは携帯ではなく、固定電話のほうだ。

つまり女じゃない。この何年か、かかわった女の中で、固定電話の番号を知っているのは、離婚した女房くらいのものだ。あの女が自分からかけてくることは、甲賀がホモに走ると同じくらい、ありえない。

ためらい、しかし理由のない期待も抱きつつ、受話器をとった。

「はこ」

「甲賀さんのお宅ですか」

訊ねた男の声を聞いたとたん、応えたのを後悔した。この声には危険な響きがある。

「はこ」

「甲賀悟郎さんはいらつしやいますか」

「私です」

「こちら本所警察署、地域課の伊藤と申します」

やっぱりだ。

「何でしょう」

「あなたの奥さんが錦糸病院の救急外来におられます。今朝早く、私どもで保護し、病院に連れていきました。ようすがふつうではなかったたので。今から病院にきていただけますか」

「ええと——今から、ですか」

「そうです。場所はおわかりですか」

「錦糸病院、ですよね。はい」

「では待っていますので。何分くらいでこられますか」

「二十分、いや三十分みて下さい、仕事があるので。いや、一時間かな」

「一時間。午前十一時ということですね」

「はい」

「おうかがいしたいこともあります。必ずお越し下さい」

電話は切れた。

甲賀は携帯に手をのばした。杜英淑の番号を呼びだす。

英淑は働き者だ。電話は、午前七時から午前一時過ぎまでつながる——筈なのだが、でない。

留守番サービスに切りかわった。しかたなく甲賀は吹きこんだ。

「甲賀だけど、俺の奥さんが病院にいるって、警察から電話があった。聞いたらすぐ連絡くれ」

四十分待った。

電話はなかった。もう一度、英淑にかけた。また留守番電話。

「甲賀だけど、今から錦糸病院にいつてくる。聞いたら俺の携帯に連絡くれるか、病院の救急外来にきてくれ。頼む」

2

救急外来の受付の前に、制服の警官が二人いた。ひとりには巡査部長だ。肩章を見てわかった。五十歳くらいか。もうひとりは若い。

「えっと、甲賀です」

声をかけると、巡査部長がふりかえり、まじまじと甲賀を見つめた。そのつもりで、なるべくまっとうな格好をしてきた。ジーンズにコーデュロイのジャケット、ハイネックのセーター。シヨルダーバッグを肩からさげ、ふだんはしない眼鏡もかけている。

巡査部長はじつくりと観察したあげく、いった。

「奥さんはあちらのほうにおられますが、その前にちよっとおうかがいさせていただいでよろしいですか」

「家内は怪我をしたんでしょうか。それとも急病ですか」

「軽い怪我ですので、心配されることはないと思います。失礼ですが、お仕事は何を？」

「インターネット関連です」

「会社はどちらですか」

「新宿です」

「電話番号をうかがえますか」

佐々木の事務所の番号をいった。話は通してある。

『KOJIRO』という会社です。アルファベットで、K・O・J・I・R・O」

「インターネット関連の『KOJIRO』という会社と」

「巡査部長はメモした。」

「きのうは奥さんとごいっしょでしたか」

「えーと、今仕事かたてこんでいまして、家に帰っていなかったもので、最後に会ったのは三日前かな。今朝、ようやく帰れたんです。ほら暮れなので」

「三日。それはたいへんですな。そのとき奥さんにかわったようすはありました？」

「ちよつと、ホームシックだったかもしれない」

「とりあえず、思いついた嘘をいった。」

「ホームシックね。結婚してどのくらいですか」

「まだ二カ月です。家内に何があつたんでしょうか」

「その錦糸公園で、今朝うずくまっていますところを保護されたんです。頭に軽い怪我を負っていたので、病院に連れてきたんですが、何もお話しにならない。そこで申しわけないんですが婦警に所持品を調べさせたところ、外国人登録証明書をおもちだった。他には、お金もバッグもなしですわ。何かトラブルに巻きこまれたのかもしれない、と考えましてね。奥さん、日本語は」

「カタコトです。あまり得意じゃない——」

「と思います、といいかけ、飲みこんだ。」

巡査部長がカードをさしだした。運転免許証と同じサイズのプラスチックカードだ。

「外国人登録証明書 氏名 李青珠 国籍 中華人民共和国」

という一番上の文字が見えた。氏名の少し下の欄に、甲賀悟郎の名が印字されている。「世帯主等」というところだ。

右下の「在留の資格」には、「日本人の配偶者等」と記されていた。

写真が左下にある。化粧のない、暗い顔をした女が写っていた。

「これはお返ししておきます。コピーはとらせていただきました」

巡査部長がいった。甲賀は頭を下げ、受けとった。

警官が体をずらし、受付に近い長椅子に腰かけている女の姿が見えた。ぼんやり、こちらを見ている。ワンピースを着ていた。

何と呼びかければいいのか。頭をフル回転させながら歩みよると、今度は白衣を着た男が立ち塞がった。

「どうも。ご主人ですか」

まだ若い。三十になったかどうかだ。それでも医師のようだ。白衣の胸には「宮前」と記されたプレートがあった。

「はい」

甲賀はまた頭を下げた。ここはそういう場面だろう。

「家内がお世話になりました」

「いいえ」

宮前医師はちらりと背後をふりかえった。

「奥さんの怪我はたいしたことはありません。転んだか、何かにぶつかったか、額の上の部分から少し出血されていました。レントゲンをとったところ、骨には異常がありませんでし、CTでも脳に、特に損傷はみられません」

「そうですか。よかったです」

「こういう場面だ。」

「ですが、ちょっと気になるところがありました」

「そうきたか。」

宮前医師はじつと甲賀の顔を見つめた。

「逆行性健忘の疑いがあります」

「何ですって?」

甲賀は訊き返した。

「逆行性健忘。ある時点から前の記憶がまるでない。いわゆる記憶喪失、と呼ばれているものです」

甲賀は瞬きした。何というべき場面だかわからない。

「これは外傷性で起こることもあります。あまり例がない。外傷性の場合は、前向き健忘といって、怪我をしてからあの記憶が抜けることが多いんです。逆行性健忘の原因は、むしろ心因

性、何か大きなショックを受けたのが理由になります。心当たりはおありですか」

「ありません」

「どんな場面だろうと、そうとしかいえない。」

「そうですか」

宮前医師は肩を落とした。

「あの、つまり家内は記憶を失っている、ということですか」

「はい。患者さんが詐病さびょうしているのではない限り」

「サビヨウ?」

「記憶を失くしたフリをする。非常に恥ずかしい思いをしたりすると、そういうこともあります。ですがこの場合はあまり考えられませんし」

「自分のことは——」

宮前医師は首をふった。

「わかりません。名前も、何をしていたのかも。ご自分が中国人であることはわかっていらっしやる。ここが日本だというのは、さつき看護師が説明しました」

甲賀は瞬きした。この言葉しか思いつかなかった。

「治るんですか」

「ふだんの生活環境に戻してあげれば、じよじよに思いだす可能性はあります。ただ、原因となつたできごとに関してだけは、思いだせないかもしれません」

甲賀は黙った。ふだんの生活環境そのものを甲賀は知らない。だが知らないというわけにはいかない。

「心因性の健忘というのは、心的な外傷や大きなストレスにさらされたときに起こります。つまり、ひどくショックなできごとにあわれ、それを認めたくない、という気持が強すぎると、そのこと自体を忘れてしまう。たとえばかわいがっていたお子さんが不慮ふりよの事故で亡くなった。それを認めたくないお母さんは事故のことを忘れてしまう。お子さんがいないといって、捜し回る」「うちに子供はいません」

たぶん。連れ子がいるとは聞いていない。

「これはひとつの例です。他にも何か大きなショックを受けるできごとがあります。ただ——」

宮前医師は声を低くした。

「肉体的に見る限りは、ひどい暴力をふるわれたとかはないようです」

つかのま、意味がわからなかった。

「それはあの——」

「レイプとか、暴力行為はうけていらつしやらない」

甲賀は頷うなずいた。そういう意味か。

「よかったです」

「治療の方法なのですが、これは専門医にかかれることをお勧めします。ただし日常生活に戻れば、記憶が戻ることもあるわけで」

「治療というのは、どんなことをするんですか」

「記憶想起法という治療法になると思います。催眠術や薬物を使った面接で、医者がだんだん過去にさかのぼって記憶を思いださせる、というものです。ただし、おおもとの原因となったできごとだけは、思いだせないという場合もあります。いわば、自分を守るために健忘を起こしたわけですから、思いだしてしまうと、また大きな心的外傷にさらされる。そこで拒否する、という反応がでる」

断言すべきところは断言する。医者らしい発言だ。ただし、目の前にいるこの女が治るかどうかについては、断言がない。

それもまた医者らしい。

甲賀は、口を閉じた宮前医師を回りこみ、長椅子の前に立った。

美人、といえなくもない。甲賀の好みではないが。

外国人登録証の写真と、本人はだいたいぶちがっていた。

まず髪が長い。写真は黒くてショートカットだが、目の前にいる女は、明るく染めた髪が肩の下まである。

甲賀の好みは、お人形のような女だ。おちよぼ口で、造作が小ぶりの顔がいい。

目の前の女は、目が吊りぎみで、顎あごが張っている。そのぶん口も大きい。

「大丈夫か」

とりあえずいつてみた。女が目を動かし、甲賀を見あげた。

「ご主人が迎えにきてくれましたよ」

宮前医師がいった。

背中が熱い。二人の制服警官がやりとりを注視しているのを、甲賀は感じていた。

女は瞬きした。

何というだろう。甲賀は待った。

結婚して二カ月。だが初対面だ。警察に保護されることさえなければ、おそらくは一生涯を過ごしたであろう「妻」。

女は無言だった。

甲賀は宮前医師を見て苦笑した。

「私のことがわからないようです」

「そういう可能性はあります。奥さん、ご主人ですよ」

女は瞬きし、口を開いた。中国語を喋った。

甲賀は首をふった。しゃがみ、女と目の高さを合わせ、ゆっくり喋った。

「俺が中国語駄目なの、忘れたか」

「奥さんをふだん、何と呼ばれていますか？」

宮前医師がふりかえった。まさにそのことを甲賀も考えていた。「李青珠」という名の読みかたがわからない。

「セイちゃん。あの、名前に青がつくんで」

とっさの嘘。

「セイちゃん、俺だ。あんたの旦那さんだ」

いいながら恥ずかしい。

「セイさん、ご主人ですよ。ご主人のことは何と呼ばれていますか」

「ゴロー」

さらに恥ずかしさがつのる。

「ゴローさんが迎えにきてくれました。お家に帰れますよ。どうです？」

宮前医師が女の顔を観察している。女が家に帰るのを嫌がるのではないかと疑っているようにも見えた。

「うち」

女がいった。

「そう、家だ。家に帰ろう、セイちゃん」

女が甲賀の顔を見た。不自然なくらい長時間、見つめ、やがて頷いた。

「はい」

甲賀はほっと息を吐いた。女がすっと立った。

長身だった。一七二センチの甲賀とほとんどかわらない。

「帰ります」

「あの」

宮前医師がいった。

「家に帰られても、すぐに記憶が戻ってくるとは限りません。あせらないで下さい」「もちろんです」

「あと、専門医の件は、いつていただければいつでも紹介いたしますので」

「ありがとうございます」

頭を下げた。

「甲賀さん」

今度は巡査部長が呼びかけてきた。

「奥さんが自宅に戻られてですね、何か事件に巻きこまれたというのを思いだされたなら——」

「はい」

甲賀は頷いた。

「地域課ではなく、刑事課のほうにきて下さい」

「そこかよ。今のうちに面倒の芽は摘んでおこうというわけだ。この年で巡査部長とまりなもの額ける。」

「所持品がなかったのも気になりますし。自宅に帰られたら、奥さんのもちもので何かなくなっているものがないか、気にして見て下さい。バッグとか時計、貴金属類など、ふだん身につけているもので」

とつさに横目で女の左手を見た。薬指に指輪はない。もっとも甲賀もしていない。

「わかりました。刑事課のどなたに？」

「それはきていただいてから」

「そうだよな。名前なんか挙げたら、よぶんな仕事押しつけやがって、と恨まれるだけだ。」

「あ、あと支払いのほうなのですが」

宮前医師がいつて、それが一番心臓に応えた。

「はいっ」

声のトーンが高くなる。

「奥さん、日本の健康保険に入っていらっしゃいますか」

「ええと、今、手続き中だと思います」

「では、まだ？」

「はい」

これは俺が払うのか。そうだろうな。

「そうなるど全額自己負担ということになります。会計にいつていただかないと、いくらかはわかりませんが——」

英淑に請求する。当然だ。

「何とかなる、と思います」

八万五千円とられた。財布の中身は半分以下になった。

「帰ろう」

病院の建物をでた甲賀は女にいつて、とぼとぼと歩きだした。病院からアパートまで歩いても十五分足らずの距離だ。

英淑から連絡がくるまでは、とりあえずこの女を手もとにおくしかない、と甲賀は思っていた。

二カ月前、甲賀は中国人の女と結婚した。英淑に頼まれたからだ。偽装結婚だった。日本人と結婚すれば、外国人に在留資格が与えられる。日本に住み、就労しても、入管難民法違反で摘発される心配はない。入国後、離婚しても、ただちに在留資格を失うわけではないし、離婚届の提出先は入国管理局ではなく、区役所だ。籍がよされるのさえ気にしなければ、結婚、離婚のくりかえしで、ひとりの日本人配偶者に対し何人も外国人が在留資格を得ることができる。

もちろん区役所だつて、やたら結婚、離婚をくりかえす男に疑いは抱くだろう。だが、

「俺は日本人より中国人の女が好きなんだ、だから結婚した。それがうまくいかなかったんで、別の中国人の女と再婚しているだけだ。いけないのか」

とひらきなおられたら何ともいえない。そこで入国管理局は、実態調査というのをするらしい。

届けでている住所に審査官が訪ねてきたり、抜き打ちで電話をして、本当に夫婦生活をしているのか、確かめる。

英淑は甲賀に偽装結婚を頼んだとき、調査に関して迷惑はかけない、といった。もちろん万一、電話があつて奥さんをだしてくれといわれたら、今でかけているのでかけなおさせる、と答える。そのときのために「妻」の名も聞いていたのだが、しばらくして忘れてしまった。

アパートに向け歩いているうちに、甲賀は思いだした。その話を頼まれたのは、今年の夏だった。一度「妻」となる女と会つておくかと訊かれ、必要ないと答えた。

会つたところで本当にいっしょに住むわけではないし、それがどんな美人だろうと本物の夫婦になるわけではない。

偽装「夫」になる日本人の中には、夫婦生活を、報酬の一部として要求する男もいるようだが、英淑はそういう連中とは取引しない。金だけで戸籍を貸す男にしか、偽装結婚の契約をもちかけないというのだ。裏稼業とはいえ、同じ女である自分が、金をとった上に体までさしだせなんて、とてもいえない。

ゴローちゃんもそんな要求しないよね、といわれ、もちろんだと胸を張った覚えがある。女好きだが、相手の感情を無視してまで意を遂げる趣味はない。

だから、今日、自分がおかれたこの状況は、さつき考えていた曲がり角問題とは無関係だ。アパートに到着した。散らかるほどのものない二Kを、三和土に立つた女は無言で見回した。「とりあえず、ここがあんたの家、ということになつて。ただ実際はここに住んでいなかっ

た。どこが本当の住居だか、俺は知らないんだ。今、あんたの友だちに連絡をとってる。迎えがくるまで、ここで待ってしよう」

甲賀はいった。女は理解できたのかどうか、ただ甲賀を見返した。

甲賀は部屋に入るとコタツにもぐりこんだ。

「どうぞ」

戸口につっ立っている女にいった。女は小さく頷き、靴を脱ぐとコタツの横にすわった。正座ではなく、膝を立てた体育ずわりのような姿勢だ。

「ここ、どこですか」

やがて訊ねた。目はせわしなく室内を見ている。テレビ、本棚、安物のデスク。

「俺が住んでる部屋だ。あんたは、俺と結婚したことになるが、俺たちは本物の夫婦じゃない。俺は頼まれて、あんたを戸籍上、妻にした。わかるか、戸籍って」

女は頷いた。

「はぐ」

「よかった。さつきは警官がいたんで、本物の夫婦のふりをしなきゃいけなかった。嘘の結婚だというのがバレたら、俺はつかまるし、あんたは中国に送り帰される」

女は無言で聞いていた。いうことがなくなった甲賀も黙った。英淑はなぜ電話をよこさないのだ。

女の着ているワンピースは、それで外にでるには薄地だ。十二月だからまだ厳しく冷えこんで

いるわけではないが、でかけるときはコートが必要だろう。それとも夜どこかで働いていて、その仕事のまま、トラブルに巻きこまれたのか。

甲賀は三和土に女が脱いだ靴を見た。ヒールのそれほど高くないパンプスだ。工作中的のホステスなら、もうちよつと踵かかとの高い靴をはく。

とはいえ、この女は一七〇センチ近い長身だ。高い靴をはくと、客より大きくなってしまおうで、わざと低い靴をはいていた可能性もある。

バッグも何もたずずにいた、というのは、働いている店から、たとえば客を送りに外へでたところで何かがあった、とも考えられる。

しかしもしそうなら、働いていた店から何らかの届けがでていておかしくない。この女は、不法滞在者ではないのだから、店も堂々と届けをだせる。

ただしその店が、違法な営業をしていたら話は別だ。女に売春をさせていたり、風営法違反の深夜一時を過ぎて接客をさせていた、という可能性もある。

何より、外国人を使っていたという理由で警察に目をつけられるのを恐れ、知らん顔をしているのかもしれない。

仕事中のホステスが店をでたきり帰らない。携帯電話も店においていたら連絡はつかない。まさか記憶喪失、逆行性健忘にかかっていると思わないから、いずれ連絡があると考え、特に捜さうとしなかった。

案外そんなところではないだろうか。

「なあ」

甲賀がいうと、女はわずかに目を広げた。

「あんた、本当に何も覚えてないのか。きのうの夜、どこで何をしていたのか」
女は無言で甲賀を見つめていたが、苦しげに眉まゆを寄せた。

「思いだせません」

「そうか」

「ごめんなさい」

「いや、別にあやまることじゃない。あんたの名前だけど——」

いいかけ、渡されたカードのことを思いだした。

「そうだ、これ」

ジャケットから外国人登録証をとりだした。

もう一度、まじまじと見る。

「氏名 李青珠」「生年月日 一九七九年 一月一日」「居住地 東京都墨田区太平三―×―×

ハイツスミダ二〇二」「国籍 中華人民共和国」「出生地 吉林省長春市」

ハイツスミダは、今二人がいるこのアパートだ。世帯主は甲賀になっている。巡査部長はこの住所と甲賀悟郎の名で、固定電話の番号を調べたのだろう。

「なあ、この名前だけど何と読むんだい」

女はカードを見つめた。

「リ・チンジュ」

甲賀にはそう聞こえた。

「これがあんただ。わかるか？ リ・チンジュって名前に覚えはないか」

「リ・チンジュ……」

女は口の中でつぶやき、首をふった。

「知りません」

「あんたの生まれたのは、これによると中国の長春だ」

「チョウシュン？」

「ええと」

甲賀はコタツテーブルの上にあったメモ用紙に書いた。

「チャンチュン」

「そう読むのか。じゃあチャンチュンだ。そこから日本にきた。滞在する資格を得るために、形式上、俺と結婚した」

女は瞬きした。

「つまり、観光で日本にきたわけじゃない。長く日本に住んで、商売をするとかそういう目的があつた筈だ」

「モクテキ？」

「そう。目標。お金をいっぱい稼ぎたい、とか」

女は首を傾げた。

「わたしお金あります」

「どこに？ 住んでいたところか。どこに住んでいたか覚えているか。中国じゃないぞ。日本で」

女の視線が宙を泳いだ。

「住所とかはわからないか。何町とか。近くの駅の名前とか思いだせないか」

「駅」

「そう。JRとか地下鉄の駅だ」

女は瞬きした。視線が止まった。やがていった。

「わかりません」

甲賀は息を吐いた。

「錦糸町って駅のことか？」

「キンシチヨウ？」

駄目だった。まるで心当たりはないようだ。

たとえ働いているのが錦糸町だとしても、住居はちがうかもしれない。もつと家賃の安い江戸川区や江東区、さらに千葉県という可能性もある。あるいはどこか近くのアパートから電車を使わず自転車を通っていたら、駅の名前がまったくわからないというのも領ける。

打つ手なし。英淑からの連絡を待つ他ない。

それで思いだした。英淑の携帯にまたかける。

「甲賀だけど、奥さんを病院からひきとってきた。とりあえず俺のアパートにいる。名前は、ええと、リ・チンジュ。いろいろこみいった状況なんで、とにかく早く連絡くれ。頼む」

切つてから、不安になった。英淑に何かあったら、この女に関する全責任は自分が背負う羽目になる。

偽装とはいえ、書類上は正式な夫だ。

外国人登録証をとりあげ、どこかにほうりだすことを考えた。本所署の管内はまずい。新宿あたりがいいだろう。

だが英淑に知られたら不人情だと責められる。連絡がつかないといつても、まだ英淑がどうかしてしまつたと決まつたわけではない。携帯をどこかに忘れただけかもしれない。

英淑は複数の携帯電話をもっているが、甲賀が番号を知っているのは一台だけだ。

「弱つたな」

甲賀はつぶやいた。女は無言だ。ただじつと立てた膝を見ている。途方に暮れているのは自分以上だろうと思うと、少し憐れになった。

「とにかく、あなたの本当の知り合いを捜してやるよ。そうすれば家に帰れる。家に帰ったら思いだせるかもしれないって、医者もいってたし」

「は」

女は小さな声でいった。

「お茶飲むか。日本茶だけど」

甲賀は立ちあがった。冷蔵庫のペットボトルから緑茶をコップふたつに注ぎ、コタツテーブルの上においた。

腹も少し減っていた。起きてから何も食べていない。

「飲んだら」

甲賀はコップに口をつけ、いった。女がおずおずとコップに手をのぼした。まるで毒入りでないのを甲賀のようすで確認したかのように、緑茶を口に含む。

「そうだ、俺の名前だけど——」

「ゴロー」

一瞬びつくりした。なんで知ってるのだろうと考え、さつき病院でいったのを思いだした。

「そう。ゴ、ゴロー」

「わたしはセイちゃん」

「いや、それはあの……。ま、いっか」

沈黙。

「ゴロー」

「何？」

「お腹がすきました。何か食べたいです」

「あんな」

「はい」

お前のせいでもち金が半分なくなっただぞ、といいかけ、やめた。今、この女を責めたところで、何にもならない。

「カップラーメンと食パンしかない」

女は頷いた。

お湯をわかし、カップラーメンを作った。ちようど二つあった。食パンを焼き、マーガリンを塗る。これも二枚だ。

カップラーメン二つとトーストをのせた皿をコタツテーブルにおき、甲賀は女と向かいあった。

妙な気分だった。このアパートで女と向かい合わせて食事をするなんて、いつ以来だろう。

最後の女は、サオリだった。暴力をふるう同棲相手のもとから逃げだし、テレホンクラブでサクラの仕事をしていた。三十七なのに、声だけは二十はたちそこそこ聞こえる。

五月の連休に、もとの男のところに戻っていった。

「ゴローちゃんはやさしすぎるんだよね。サオリはそういう人って物足りないみたい」

それが別れるときの言葉だ。

トーストをかじり、カップラーメンをすすった。

「トイレどこですか」

食べ終わると女が訊ねた。甲賀は教えた。トイレに女が入っている間に皿を洗い、お茶を注ぎ

足した。

少し気持に余裕が生まれた。

煙草を吸っていると、トイレをでてきた女がじつと甲賀を見た。

「煙草、吸いたいのか」

女は首をふった。どうやら煙草は吸わないようだ。煙草までたかられる心配はない、と安心した自分に、甲賀は少し落ちこんだ。せこすぎる、俺。

「トイレに写真ありました」

「え？」

写真なんて飾っていない。

「わたしのトイレです。白い山の写真、わたしのトイレにありました」

「あなたの家の話か」

女は頷いた。

「それって最近のこと？ 子供の頃の話じゃなくて」

「きのう」

「思いだしたんだ」

「はい」

「他に何を覚えている？ 誰かいつしよに住んでた人の顔とか」

女は瞬きし、宙を見つめた。

「へび」

「へび？」

蛇を飼っていたのだろうか。少し薄気味悪い。

「蛇が部屋にいるのか」

女は首をふった。

「何か、景色を覚えていないか。その住んでいた部屋の窓から見たもの。ビルのネオンとか、

電車とか」

女は甲賀の顔に視線を向けた。

「ビル」

「どんなビル？」

「壁。よごれてる壁が見えました」

「看板は？ 何か字が書いてなかったか」

女は首をふった。

「壁だけ」

窓から壁しか見えないアパートやマンションなんていくらでもある。

「ええとさあ、じゃ地名をいうから、聞き覚えがあったら、教えてくれ」

「はい」

「新宿」

まずはここからだ。女は小さく頷いた。

「知ってます」

中国人なら当然か。何せ最近は、中国からの日本観光ツアーで、「東京のいつてみたい場所」のトップが、新宿歌舞伎町らしい。理由は、「東京で一番中国人が多い」から。アメリカにいた日本人が、ロスアンゼルスのリトルトウキョウを見たがるようなものかもしれない。

「池袋」

女はわずかに首を傾げた。

「聞いたことがあります」

これでは駄目だ、と気づいた。女が二カ月前に日本にきたばかりだとしても、有名な地名は知っていて不思議はない。もっとマイナーな、住んでいなければ知らないような地名に反応しなければ意味がない。

「錦糸町は知らなかったんだよな。じゃあ葛西、浦安、市川、柏、松戸」

女は無反応だ。

甲賀は立ちあがった。女が驚いたように顔をあげる。デスクにつくと、古い手帳をとりだした。

東京の地図が載っている。思いつくままにいうより、地図を見ながら挙げたほうが確実だ。

主だった町の名前をいっていく。

「六本木」

「知ってます」

これも微妙だ。盛り場は、知っていたとしても、働いていたとか住んでいた証拠とはいえない。

「原宿、渋谷、恵比寿、目黒、五反田——」

無反応だ。

「銀座」

「はい」

甲賀は女をふりかえった。

「はいとは、知ってるってことかい」

「わたし、働いていました」

銀座か。甲賀はまじまじと女を見直した。

「あなた、銀座で働いていたのか」

いった女のほうが、びっくりしたような顔をしている。

「どうしたんだ？」

「今、思いました。わたしは銀座で働いていた」

「それって思いましたってことだよな」

「そう、です。きつと」

「銀座の、飲み屋か」

「ノミヤ？」

「ええと、クラブとか、お酒を飲ませる店だよ」

「わかりません」

女は虚ろな表情になった。

「まさか銀座とはな」

甲賀はつぶやいた。銀座なんてまず足を向けることのない街だ。銀座の飲み屋とは、まるで無縁だ。

だが、もし女が銀座の飲み屋で働いていたのなら、なぜ錦糸町の公園にいたのかわからない。

「働いていた土地はわかった、と。じゃ今度は住んでいた場所だな」

また地図を見ながら地名を挙げていった。

「四谷、信濃町、市ヶ谷、飯田橋——」

山手線と中央線の主だった駅は全部いった。反応があつたのは、新宿と池袋だけだ。このどつちかに住んでいたとも考えられるが、銀座から通うには少し遠い。あとは六本木を知っていた。

英淑からのコールバックはない。

「そうだ」

甲賀は声をあげた。時計を見る。二時だ。

「でかけるぞ」

「どこへいきます?」

女は不安げだ。

「中国人がいるところだ」

「中国人、ですか」

英淑が経営に関係しているマッサージ屋が錦糸町の駅前にあつたのを思い出したのだ。中国マッサージの店で、従業員はすべて中国人だ。そこにいけば、英淑と連絡がつくかもしれない。

「いこう」

せきたてるようにしてアパートをでた。

めざす店「西安」は、J Rの線路の南側、楽天地ビルの近くにあつた。古い雑居ビルの二階だ。年中無休で、午前十一時から午前五時までやっている。

「はい、いらっしやいませー」

狭い階段をあがって入口の扉をくぐると、まのびした声がかげられた。あちこちのマッサージ台からも、

「いらっしやいませえ」

という声がある。足裏やボディのマッサージをしている女たちの合唱だ。

「社長」

甲賀は、最初に声をかけてきた受付の男をのぞきこんだ。六十代の初めくらいだろう。頭頂部がきれいにはげている。英淑が「社長」と呼んでいるのを聞いたことがある。

この店には、英淑と二回、きていた。二度とも英淑の奢りもてでマッサージを受けた。

「俺のこと覚えてないか。英淑さんの友だちの甲賀だ」

店はそこそこ混んでいた。十ほどあるマッサージ台の半分以上が埋まっている。

「甲賀さん？」

「英淑さんと連絡をつけたいんだけど、電話がつかなくなって困ってるんだ。社長、英淑さんの友だちだよ」

社長は困惑したように甲賀と背後の女を見比べた。

「杜英淑さんだ」

甲賀はいった。

「ああ、杜さん。はいはい」

ぱっと社長の顔に明りが点った。

「わかりました、わかりました。銀座でレストランやってる人です」

「銀座でレストラン？」

今度は甲賀が訊き返した。

「ちがうですか。太った女の人で、声の大きい——」

「そうそう、その人だ。銀座でレストランなんてやってたのか」

初耳だった。

「はい、共同経営してます」

「店の名前は？」

「ええと——、ここね」

受付のひきだしを開け、名刺をとりだした。

「中国名菜『紅籠飯店』と書かれている。住所は、銀座七丁目、セブンスビル地下となっている。

「実はこの人が英淑さんの知り合いなんだが、急いで英淑さんと連絡をつけたがっていて、俺の知ってる電話番号だとつながらないんだよ」

社長は女を見た。

「中国人、ですか」

「はい」

女は頷いた。社長が中国語で何ごとかいった。女が返す。やりとりがしばらくつづいた。

「あなた、この人の旦那さんですか」

やがて不思議そうに社長が訊ねた。

「それはそうなんだが——」

甲賀は受付のテーブルに手をつき、声をひそめた。

「実は本当の夫婦じゃない。わかるだろ」

社長の目が広がった。あせったようにあたりを見回す。

「それ駄目です」

「ああ、わかっている。だから俺は彼女のことを何も知らないんだ。英淑さんなら知ってると思う

んだが——」

そのとき、「西安」の扉が開かれた。

「いらつしやいませ——」

反射的にいった社長の顔がひきつった。甲賀は扉をふりかえった。

「おっ」

入ってきた客が低い声をたてた。

「何やってんだ」

甲賀をまじまじと見る。甲賀は目をそらし、天井を仰いだ。よりによって、最低の奴と最悪のタイミングでくわしたものだ。

「見りゃわかるだろう。マッサージを受けにきたんだ」

甲賀はいい返した。柔道をずっとやっていて、その証に両耳が潰れている。顔半分、甲賀より大きく、幅も一・五倍くらいある。

「いいご身分だな。平日のまっ昼間からマッサージか」

伊賀はいった。甲賀と伊賀という名前からして、合わない相手だった。機動隊あがりの体力馬鹿で、身体能力が自分より劣る人間を下に見たがるのは、そのぶん頭に自信がないからだ。

「よけいなお世話だ。気分が悪いな。セイちゃん、いこう」

甲賀は女をうながした。顔をひきつらせたところを見ると、「西安」の社長は伊賀を知っているようだ。

「なんだよ、逃げんのか。何かうしろ暗いことでもあんのか」

伊賀の背後には、まだ二十代にしか見えない若造がつつ立っていた。

「冗談じゃない、妙なアヤをつけないでもらいたいね」

若造を押しつけ、女の腕をとって「西安」の扉をくぐった。

「待てよ」

伊賀が追いつがってきた。

「何だ」

「訊きこみにきてんだ。あんたの連れ、中国人だろう」

「それがどうした」

伊賀は若造に顎をしゃくった。若造が内ポケットから手帳を抜き、はさんでいた写真を取り出した。

「この人に見覚えはありませんか」

嫌な予感がした。甲賀は若造の手から写真をひったくった。ひと目見てほっとした。英淑ではない。知らない男だった。修整されているが、死体だとすぐにわかった。

「ちよっと——」

「協力してんだよ。セイちゃん、この人知ってるか」

女は写真を受けとり、眉根を寄せ、のぞきこんだ。しばらく見つめていたが首をふった。

「知りません」

それ以上余分なことをいわないうちに、写真を若造に返した。

「知らないとき。じゃあな」

「そんなにあせるなよ」

背中を向けた甲賀の肩を伊賀がつかんだ。甲賀は伊賀をにらんだ。

「何だ、その手は」

「まだ質問が終わってない」

「知らないつってんだ。これ以上何を訊くんだ」

「まあ、そうとんがんなよ。久しぶりに会ったんだ。近況報告とかあってもいいんじゃないの??」

伊賀はごつい顔におよそ似合わない作り笑いを浮かべている。

甲賀も作り笑いを浮かべてやった。

「別に報告するようなことは何もしてない。いたって静かなものさ。今は友だちの会社を手伝ってるんだ」

「友だちの会社ねえ」

伊賀は首を傾げた。

「あんたが考えているようなところじゃない。IT関係の会社だ」

「俺が考えてるようなとこつってどこだい」

作り笑いを大きくして、伊賀はいった。

「いい加減にしろよ。もっとやることがあるだろうが」

甲賀がいうと、伊賀は笑みを消した。

「じゃあ訊くぞ。最近、中国人関係でトラブルの噂を聞いたことないか。中国人に知り合いが多いあんたなら、何か知ってるだろう」

「このところずっと仕事が忙しくてな。知り合いに会う暇もなかったんで知らん」

伊賀は若造をふりかえった。

「聞いたか、この返事。元同僚に協力しようって気はまるでないらしい」
若造が目丸くした。

「そりゃあ悪かった。何か聞いたら連絡してやるよ。じゃあな」

甲賀はいつて、階段を駆け降りた。さすがに伊賀は追ってこない。

女が降りてくるのを待って、甲賀は歩きだした。

「今の人、友だちですか」

信号で立ち止まった甲賀に女が訊ねた。

「友だちじゃない。知り合いなだけだ」

吐きだすように甲賀はいった。

「もともと気の合わない奴だった。仕事を辞めて唯一よかったのは、あいつと顔を合わせないですむことだったのに、まさか今日会うとはな」

「仕事、何ですか」

「いいたくない」

甲賀は首をふった。元警官だなどといったら、なぜ辞めたのかを今度は訊かれる。そんな話はしたくない。

信号がかわり、横断歩道を甲賀は歩きだした。女があとをついてくる。

「わたし、知ってます」

甲賀は女をふりかえった。

「俺の仕事を、かよ」

「ちがいます。あの写真の人」

思わず立ち止まった。

「勘弁してくれよ。本当かよ」

泥沼の臭いにじまがした。

「はい。名前とかはわからないですが、会ったことあります。見てすぐわかりました」

「どんな話をしたのか覚えてないのか」

女は考えこんだ。歩行者用の信号が点滅を始めた。駅前の広い通りだ。甲賀は、

「走るぞ」

といて駆けだした。女もあとを追ってくる。

渡りきって歩道にあがったところで女がいった。

「わたし走ったです。あの人と会ったとき。今、思いました」

「写真の男と会ったときに走ったということか」

「はい」

「なぜ走ったんだ？」

女は眉根を寄せた。

「誰か、きました。走ろうといわれました」

「それは逃げろっていわれたってことか」

「そうです。写真の人が逃げようといいました」

ますます泥沼の臭いが強くなった。この女と写真の男はいつしよにいた。そこに誰かが現われ、

二人は逃げた。そして写真の男は死体になり、警察が身許みもとを調べている。

「それは最近の話か。きのうとか？」

女は考え、答えた。

「きのうか、そのきのう」

コンビニエンスストアの前におかれた灰皿のかたわらで甲賀は足を止めた。煙草をとりだす。

「なぜさつき、知ってるっていわなかった。あいつらに訊かれたとき」

「何となくいいたくない気がしました。ゴロー、話すのを嫌そうだったから。わたしもあの人、

好きじゃない。いばってます」

女を見直した。

「俺たち気が合うかも」

女が微笑^{ほほえ}んだ。初めて見せる笑みだった。

この女には、今頼れるのは甲賀しかない。その甲賀に「気が合う」といわれて喜んでいる。ほうりだすのはかわいそうだ。だが、ほうりださなかつたら、自分もひどいトラブルに巻きこまれる。

コンビニエンスストアから流れてくるクリスマスソングは、甲賀の気をよけいに滅^{めい}入^いらせた。

4

「何やってんだ。早く連絡をくれ。こっちは奥さん抱えてずっと待ってるんだ」

英淑の留守電に四つめのメッセージを吹きこんだ。

二人はまたアパートに戻ってきていた。

「その人、友だちですか」

「杜英淑っていつてな、あんたが俺の奥さんになる話をもってきた中国人だ。あんたは会ってる

筈だ」

「ト・エイシユク？」

「ええと」

メモに字を書いた。女が発音した。

「覚えはないか」

小さく首をふった。

甲賀は「西安」で見せられた「紅龍飯店」の名刺を思い出した。伊賀の出現で、「西安」での情報収集はままならなかつた以上、次はそこに行くほかない。いくら何でも銀座の中華料理屋で、伊賀とはでくわさないだろう。

とにかく、早く英淑を見つけだすことだ。

英淑の身に何かが起こったという可能性については、極力考えないことにした。そうなつたら本当に、この女をどこかでほうりだす以外、選択肢はない。ただ、ほうりだしたあと、女がまた警察に保護されたら、事態は甲賀にとってさらにややこしくなる。

銀座七丁目セブンスビル、という住所を覚えている。英淑がレストランの「共同経営者」におさまっていたとは初耳だったが、金儲けが大好きな英淑なら、驚くにはあたらなない。

おそらく日本や東京の事情に詳しいのを買われて、一種のケツモチとして経営に加わつただろう、と甲賀は思った。

「その人の写真、ありますか」

不意に女が訊ねた。

「見たら知ってるかもしれません」

「英淑のか？ ない」

甲賀は首をふった。

「ころころ太っていて、濃い化粧をしている四十くらいの女だ。出身は確か、上海とかいって

た」

女は首を傾げた。

「ゴローの友だちですか」

「そう、だな。もう知り合つて三年くらいになる。がめついで、根はいい奴だ」

「ガメツイ？」

「まあいいや。とにかく友だちだ。俺は信用してるし、たぶんあいつも俺を信用している」

「その人がわたしを奥さんにしなさいといったですか」

甲賀は頷いた。

「二カ月前だ。たぶんそれだけ日本語を喋るところを見ると、あんたはその前に日本にきていた。こつちで腰をすえて何かをするのが目的で、長期の滞在許可を得るために、結婚をした。ふつうは、皆、観光ビザでやつてきて、出入りをしながら日本で仕事をする。ビザの期限が切れても、面倒だからつて更新しないでいる奴も多い。留学ビザで来た人間も、こつちで稼ぐのが目的だと、学校なんかいかないで働いてばかりだ。ただ学校にいつていないのがバレると、面倒なことになる。それに比べたら、日本人と結婚するのは一番確実だ。ただし金がかかる。日本円で何百万だ。旅費とは別で、あんたはその金を払つて、俺と結婚した」

「お金は杜さんがもらつたのですか」

「英淑ひとりじゃない。こういうビジネスには、両方の国に代理人みたいのがいて、手数料をとつてる。中国にも日本にも。たぶん、三人か四人で、あんたの金を分けた筈だ」

「ゴローは？」

一瞬、言葉に詰まつた。

「俺は……俺ももらつた。俺がいなけりゃ成立しない話だからな」

女は複雑な顔をした。

「前にも、中国人と結婚しましたか」

「いや。これが初めてだ」

「日本人とは？」

「一回したよ。だいぶ前だ。離婚した」

答えて、女を見た。

「あんたは、つて訊いてもわからないだろうな」

女は無言だった。

「結婚はしたが、俺はあんたに会う気はなかった。会つたつてしかたがない。形だけの夫婦なんだ。会つて、自分の奥さんがどんな美人でも何かできるわけでもないし。本当は、とかのチエックがあるんで、会つて打ち合わせておいたほうがいいんだが、面倒だから、何かあつたときにしようと思つた。英淑がうまくやるつていつていたし。それがいきなり今朝、呼びだされたわけだ」

「ニューカン？」

「役所だ。外国人の出入りを監視する」

女は沈黙した。やがて訊ねた。

「わたしといっしょだと、ゴロー、困るですか」

答えようとして、窮した。はつきり困る、というのも憐れだ。といって、大歓迎という気分ではもちろんない。

これが自分の駄目なところだ。

「今はまだ困らない。この先は、わからないが」

女はじつと甲賀を見ている。

「わたし、誰も知らない。何も覚えてない。お金もない。中国にも帰れない。もし帰っても、どこに家あるかわからない」

「確かにそうだ」

「でも、わたしあなたにお金払った。だからここにいってもいいですか」

「金はな、ほとんど残ってないんだ。借金が英淑にあつて、それを帳消ししてもらった。あんなの病院代もあつたし、金は、あんまりない」

「ゴロー、仕事は何ですか」

「ないよ。いろんな仕事をちよつとずつして稼いでいる。今、日本はすごく不景気なんだ。だからなかなか仕事が見つからない。そんな国に出稼ぎにこようっていうんだから、中国人もいい度胸だと思うぜ。あんたは自分がどんな仕事をしてたのか覚えてないのか」

女は静かになった。

「夜の仕事じゃなかったか。夜つてのは、つまりホステスだ。水割りを作ってやったりカラオケの相手してやったり——」

「わからない」

女は首をふった。

甲賀は息を吐き、頭を抱えた。やはり誰か中国人で、この女を知っている人間を捜すしかないようだ。

問題は、伊賀がもっていた写真の男だ。

あの男は、不審な死に方、たぶん殺されている。でなければ、刑事が身許を調べて回らない。

その男を、この女は知っている、といった。それどころかいっしょに逃げた、という。この女が頭に怪我をして保護されたのは、その翌日か二日あとだ。

下手をすると男が殺されたときにいっしょにいた可能性すらある。

この女が殺したのだろうか。いっしょに逃げたという以上、それはないか。

それとも殺しておいて、犯人と疑われるのを避けるため、記憶喪失のフリをしているとか。

これも考えづらい。犯人なら、保護とはいえ、警察とはかわりもちたかない筈だ。むしろ、いっしょに襲われたと考えるほうが妥当だ。

嫌な感じがした。二人を襲った犯人は、まだ女を捜しているかもしれない。そんな状況で、女を連れてうろろろすれば、自分も事件に巻きこまれる。「紅龍飯店」にいくのが最善の策かどうかわからなくなってきた。

と違って、ずっとここで女といても、英淑と連絡がつかない限り、問題は解決しない。

二人分の食費で金が尽きるだけだ。

「あなた、お金もらったなら、わたし助けなければいけない」
女がいった。甲賀はむっとした。

「そういういいかたはないだろう。俺が金をもらったのは、結婚することに対してであって、あなたの面倒をみるためじゃない。これはアフターサービスみたいなもので、俺は親切でやってるんだ」

「でもあなたはわたしの夫です。奥さんが困ったら、助けるのは旦那さん」

「だから書類上の旦那で、本物の旦那じゃない。それにな、本物の夫婦だって、片方が困ってるときに、もう片方が助けるとは限らないんだ」

「あなた、奥さんに捨てられたのか」

「おいつ。何だよ、それ。俺を怒らせたいのか」

「怒るのは本当だからか」

「うるさい！」

思わず怒鳴った。最初は憐れと思ったが、どんどん凶々しくなっている。民族性なのか、この女の性格なのか。

だが女は黙った。

「もういい。いくぞ」

甲賀は立ちあがった。

「銀座に、英淑のやつてるレストランがあるらしい。そこにいって、あんたのことを訊く。たぶん中国人がいつぱいいるだろうから、何かわかるだろう」

J Rで有楽町にでて、そこから歩いた。セブンスビルは見つかったが、きてみると有楽町より新橋のほうが近かった。有楽町イコール銀座という思いこみのせいだ。

夕方の六時を過ぎ、街にはちらほら夜の勤めらしい男女の姿が増えていた。日が暮れて気温が下がり、コートをもたない女は寒そうだ。

だからといって、どうしてやる気も甲賀はなかった。まあ、あったとしてもこの街で女ものコートを買ってやれるほどの懐もない。

飲み屋の建物ばかりが並んだ、派手な通りにセブンスビルはあった。家賃も相当高いだろうと甲賀は想像した。

「紅龍飯店」は地下一階だ。狭い階段を降り、扉をくぐると、入口に近い席にたむろしていた四、五人の中国人のうちのひとりが、

「いらっしゃいませー」

と声をあげた。うち二人は、中華料理屋のウェイトレスというよりは、ホステスのようななりをしている。出勤前に暇潰しに寄った知り合いかもしれない。甲賀たちには目もくれず、二人とも携帯電話をいじっていた。

「いや、客じゃないんだ。杜英淑さんの知り合いの者なんだが、杜さん、今日きたかい？」

店に客はいない。白い上つぼりを着た、コックらしい男二人とジーンズをはいた女が顔を見合
わせた。

「誰ですか」

ジーンズの女が訊いた。五十くらいでエプロンをかけている。

「杜英淑だ」

「ドウ・ヨンスク」

女が甲賀のうしろから進みでて喋った。

「ああ」

男のひとりが頷いた。若いほうだ。

「きてないよ。ここにいない」

「それは、たまにしかこないってことか、それともふだんからまったくこないってことか」

甲賀が訊くと、男は首を傾げた。どうやら日本語をあまり話せないようだ。甲賀は女をふりか
えった。

「あんたから訊いてくれ。杜英淑を捜していて、急いで連絡をとりたい。それと、あんたのこと
を知っていないか」

女が中国語で喋った。エプロンの女が最初に答えた。女がさらに喋った。自分のことを知らな
いか、訊ねたようだ。

携帯電話をいじっていた若い女二人が顔をあげ、女を見た。両方とも二十代の初めで、けっこ

うな美人だった。そのうちのひとりが何ごとかを喋った。

女が甲賀をふりかえった。

「わたしはホステスかと訊きました。わたしはホステスだったですか」

「わからない。彼女はあんたを見たことがあるのか」

甲賀は答えた。すると若い女が日本語でいった。

「八丁目の『キャロット』でクラブに、中国人のホステスが四人いるよ。その中に、この人と似
た人がいるね。この人、病気ですか」

「そうなんだ。頭に怪我をして、自分がどの誰かわからなくなっている。だから知っている人
を捜している」

「あなた知らないのですか。いつしよにいるのに」

「手伝ってるだけだ」

「見つけるとお金もらえますか」

「しっかりしている。」

「少しなら」

「この人、写メ撮っていいですか。知り合いにメールで送るよ。わかったら返事する」

わずかに悩んだが、甲賀は頷いた。この女の身許が判明したら、あとで本人に礼金を払わせる
手もある。

ホステスらしい二人の女は立ちあがった。カメラモードにした携帯電話をかざし、近づいてく

る。自分が写りこまないように、甲賀は後退^{あとずさ}った。

女は無言で写真を撮られていた。甲賀はエプロンの女にいった。

「杜さんと急いで連絡をとりたいんだ。この人は、たぶん杜さんと知り合いだ」

「杜さん、お店にめつたにこないです。くるの、お客さんといっしょのとき。さっきこの人にもいいました」

エプロンの女は答えた。

「誰か、杜さんの連絡先を知らないか。俺の知っている携帯^{携帯}にはでないんだ」

エプロンの女が、年かさのほうの男に中国語で訊ねた。男はうさんくさげに甲賀と女を見ていたが、やがて中国語で喋った。

「社長が知っているかもしれないけど、社長はまだきていないです」

エプロンの女が訳した。

「社長に電話をして訊いてくれないか」

「電話さつきしたけど、でなかった。きつと忙しいね」

ホステスらしいひとりがいった。

「社長、お台場と渋谷でも店、やってる。忙しくて大変」

もうひとりのホステスが中国語で何かいった。どうやらその女と社長^{社長}の関係をからかったようだ。男二人とエプロンの女がどつと笑った。からかわれた女はふくれ^{ふくれ}面をした。

「じゃ、メールでもいい」

「今、打ってる」

からかったホステスがいった。

「写^写メもいっしょに送るから」

「助かる」

「あなたの番号、教えて。知ってる人いたら、かけてもらう」

甲賀は携帯電話の番号をいった。エプロンの女がメモをした。そしていった。

「すわって。誰か返事くるまで、待ってるといい」

「商売の邪魔にならないか」

「まだ早いよ。ここにくるの、同伴^{同伴}のお客さん。七時くらいから」

中国人ホステスが同伴出勤につきあう客を連れてくるようだ。同伴出勤とは、ホステスが客といっしょに入店することをいう。客に食事を奢らせ、さらに店でも散財させる。店側がホステスに、月何回、同伴^{同伴}させるといふノルマを課している。ノルマを果たせないホステスは給料を引かれ、ノルマを果たせば店は売り上げを確保できる。日本の飲み屋のシステムだが、英淑が以前、感心していた。このシステムを考えだした経営者は天才だ、と。

甲賀と女が近くのテーブルにつくと、エプロンの女が中国茶をだした。メニューをテーブルにおく。

「お腹空いてないですか」

商売モードに入った。断わろうかとも思ったが、協力を頼んだ手前、しかたなく甲賀はメニ

ーを広げた。実際、腹も少し減っている。

一番安そうな、チャーハンを二つ注文した。

一般に、中国人は日本人よりはるかに量を食べる。若い女でも、日本の男並みかそれ以上食べるものだ。したがって中国人がやっている食べ物の屋は一人分の量が多い。さらにこういう店では、連れてきた客の払いから中国人ホステスがキックバックをとったりする。日本人ではあまり考えられないが、中国人にはふつうのようだ。見かたをかえれば、一種の互助システムともいえる。

年かさのコックが立ちあがり、厨房に入った。やがて中華鍋で調理するカンカンという音とともに香ばしい匂いが漂ってきた。

甲賀は店内を見渡した。入口から奥までまっすぐの細長い店にテーブルを並べている。壁には料理の写真がべたべた貼られ、銀座の料理屋という高級感はまったくない。値段も、昔から銀座にあるような店だったら決してつけないような「チャーハン 六百元」といった安目の設定だ。

おそらくこれで朝の四時、五時まで営業しているのだろう。壁に貼られた飲み物メニューには、ワインからレモンサワーまである。中国人ホステスは、同伴だけでなく、営業終了後のアフターにも客を連れてくるだろうし、安いのに惹かれて日本人のボーイやホステスもくるかもしれない。

高級の代名詞みたいな銀座だが、大衆的な飲食店が増えてきて、働き者の中国人が侵食を始めている。それもこうした底辺からだけでなく、新宿あたりには、かなり高い飲み代をとる中国人専用のクラブもできているらしい。新華僑と呼ばれる、中国大陸出身の金持を相手にしているのだ。やがては銀座にも、そういう店ができ、中国語を話せないホステスやボーイは使ってもらえないという時代がくるかもしれない。

そのうち、高級店は中国人の客ばかり、日本人は大衆店でしか飲めないようになる。

チャーハンが運ばれてきた。

「食べよう」

甲賀はいつて、蓮華を手にした。女は写メを撮られてから緊張しているのか、無口になっていたが、空腹だったのか、チャーハンを黙々と食べ始めた。

味のほうは、可もなく不可もない。日本人向けの高級店なら、もっとおいしいものをだすだろうというレベルだ。

「わたし、店いくよ」

二人が食べ始めると、最初に写メを撮るといったホステスがいつて立ちあがった。

「メールの返事きて、知ってる人いたらあなたに教える」

「ありがとう」

甲賀は答えた。ホステスは頷き、女に中国語で何かいった。女が答えた。

「何ていったんだ」

ホステスがでていくと、甲賀は女に訊ねた。女は、微妙な表情になった。

「冗談」

「冗談？」

「ゴロー、あまりお金持じゃない。だからお礼、あまり期待できない」
甲賀は頷いた。

「そうだ。けどあんたがどこの誰かわかれば、あんたの家にお金があるかもしれないし、あなたの友だちが払ってくれるかもしれない」

「わたしの名前、あんたじゃない。青珠^{チンジュ}」
女がいった。

「日本人、すぐ、あんたとかお前っていう。名前、ちゃんと呼んで下さい」
「思いましたのか」

甲賀は女の顔を見つめた。女は首をふった。

「思いたしていません。でも、あんたといわれるのは嫌です。わたしもあなたをゴローと呼んでは
まず」

「呼び捨てじゃないか」

「ヨビステ？」

「日本では、ふつう、さんとかちゃん、とつける。ゴローさんとかゴローちゃん」

「ゴロさん」

甲賀は苦笑した。

「いいよ、ゴローで。あんたのことは青珠と呼ぶ」

女は頷いた。それから二人は無言でチャーハンを平らげた。

食べ終わると甲賀はお茶のおかわりをもらい、煙草に火をつけた。今は、この店の社長とさっきのホステスだけが頼りだ。青珠が「キャロット」とかいうクラブのホステスだったのなら、そこに連れていけば何とかなるかもしれない。

甲賀の携帯が鳴った。知らない携帯の番号が表示されている。

「はい」

「わたし。さっき『紅龍飯店』で会った」

若い女の声がいった。

「早いな。何かわかったのか」

「わたしの友だち、その人知ってるかもしれないとメール返事きた。あなたの番号、教えていいか。友だち、あまり日本語うまくない」

「大丈夫だ。彼女に通訳してもらおう。ありがとう」

「もしわかったら、お礼、いくらくれますか」

「一万円でどう？」

「オーケイ」

電話は切れた。値を吊り上げられなかったことに甲賀はほっとした。

店の電話が鳴った。馬鹿に大きな音だ。

エプロンの女が立ちあがり、受話器をとった。中国語で応える。

やりとりを聞いていた青珠の表情が変化した。ふりかえってエプロンの女を見ている。

電話を切った女が甲賀たちのテーブルに歩みよつてきた。

「社長、もうすぐきます。この人、知ってるそうです」

甲賀はほっと息を吐いた。とたんに、さっきのホステスらしい女と約束した一万円が惜しくなつてきた。

「紅籠飯店」の社長が青珠のことを知っているなら、あの女の友人の情報は必要ない。青珠は社長に預け、あとは任せて終わりだ。

甲賀はよほどさっきの女に電話をかけて、謝礼の件はなしにしてくれ、と頼もうかと思つた。が、とにかくこの店の社長と話すまではようすを見ようと決めた。

十分が過ぎた。

社長は現れない。かわりに同伴と覚^{おぼ}しい、日本人の男と中国人のホステスのカップルや、出勤前のボーイらしい黒服姿の男たちがやつてきた。

黒服の中にも中国人はいるようで、中国語でエプロンの女とやりとりを交している。さらに二十分が過ぎ、店はどんどん混んできた。七時半には満卓になつた。そうなると片付ける間を惜しんでか、エプロンの女は、他のテーブルからでた空き壘^{びん}やグラスを、甲賀たちのテーブルにおき始めた。人手が足りないのもあるだろうが、これ見よがしに邪魔者扱いをされている感じだ。

八時になつた。さすがに甲賀は、

「まだかな」

とエプロンの女に声をかけた。

「わたしわからないよ。社長、さつきくるといつたよ」

女は料理の皿を運びながら、つつけんどんに答えた。

甲賀は舌打ちをこらえた。どこからくるかは知らないが、一時間は待っている。急に用事ができてこれなくなつたとしてもいふのだろうか。だがそうなら、連絡くらいあつてもおかしくない。

そこへさらに新しい客が現われた。四人組の男だつた。

「いらつしやいませ——」

エプロンの女がいつて店を見回し、嫌な目つきを甲賀に向けた。

「いいよ、いいよ、でるから」

甲賀はいつて立ち上がった。表に立つて待つなり、階段に腰かけるなりしてやる。

「はっ」

女はいつて甲賀たちのテーブルをおさなりに雑巾^{ぞうきん}でぬぐい、

「どうぞ」

と新来の客に声をかけた。甲賀は財布をだしながら女に告げた。

「外で待つてる。社長さんがきたらそういつてくれ」

「はい。千二百円」

青珠は黙って甲賀にしたがった。

店をでようとして、四人組がまだ出入口につつ立っていることに甲賀は気づいた。四人ともスーツにネクタイを締めている。

不意にそのひとりが中国語を喋った。青珠が驚いたように顔を上げた。

甲賀は思わず男と青珠の顔を見比べた。

「知り合いか」

青珠が答えるより先に、別の男が日本語で甲賀にいった。

「お前誰だ」

甲賀は無言で男を見返した。いきなりお前はないだろう。そう思ったが、いい返す度胸はない。

「お前、誰だっかってんだよ」

その男が甲賀に再度いった。どうやら日本人のようだ。

「いきなりそういう訊き方はないだろう。あんたら彼女の知り合いか」

相手が日本人だとわかったので、甲賀は少し強気でいくことにした。やくざ者のようには見えない。

「わたし知りません」

青珠がいった。

「この人、わたしにいっしょにこいといいました。でもこの人知りません」

「悪かったな」

不意に日本人がいった。

「なんで俺たちのことがわからないのか、わからないけど、同じ店の仲間なんだ。だから声かけた」

「同じ店？」

「そう。この近くのクラブ」

日本人はあいまいに右手を動かした。

「お宅ら、そこで働いている人たち？」

「ああ。彼女と連絡がつかなくて捜してたんだ」

だとすれば話は合う。ただ水商売にしては口のきき方が乱暴だ。これから客になるかもしれない相手に向かって、お前誰だ、とはふつう訊かない。

「店の名前は？」

「え？」

「働いてる店の名前を訊いている。これから彼女といこうかって話していたんだ」

甲賀は男の目を見つめ、いった。男は瞬きした。

「いや、今日は休みなんだ。その、改装工事が入ってて。俺らは手伝いで駆りだされたけど——」

「そうなんだ。何て名前の店？」